

中学生の学校適応に関する心理学的研究

－無気力と性格特性との関連から－

近 藤 真由子

1. 研究目的

本研究は中学生における学校適応について検討することを主たる目的とする。具体的には、第1に、中学生において適応と性格特性、無気力との間にどのような関係があるのかについて検討すること、第2に、学校適応状態にある生徒の性格特性、無気力感のパターンが発達によってどのように変化するかを明らかにすることにより目的を解明する。

2. 研究方法

和歌山県内の市立中学校1～3年生、計570名を対象に春学期、秋学期の2回、担任教師を実施者として、クラス毎に質問紙を配布して一斉に行った。調査用紙は『学校適応感尺度』『性格特性尺度』『無気力感尺度』で構成した。

3. 結果

学校適応感と性格特性、無気力感との関連を検討するために、それぞれの下位尺度の相関をPearson 相関係数によって男女、学期別に算出した。その結果、学校適応感、性格特性、無気力感は相互に関連し合っていることが明らかになった。

各尺度における春学期と秋学期の差を検討するために、下位尺度ごとの平均値と標準偏差(SD)を男女別に算出し、平均値の差の検定(t 検定)を行った。その結果、「学習適応感」は春学期の方が秋学期より、「友人適応感」は秋学期の方が春学期より高いことが認められた。性格特性では、春学期と秋学期で差はほぼ認められなかった。無気力感では、女子において、秋学期の方が春学期よりも高いことが認められた。

「無気力感」をもとに分割した4群と「学校適応感」、「性格特性」との関連について検討するため、学年ごとに1元配置の分散分析をおこなった。その結果、春学期から秋学期にかけて無気力感が低くなった生徒が、高くなった生徒に比べて学校適応しているという認識があることが認められた。また、春学期から秋学期にかけて無気力感が低くなった生徒は、高くなった生徒に比べて外交的で協調的な性格を有することが明らかになった。

4. 結論

春学期、秋学期ともに、生活に張りを感じ、将来展望を有している生徒は、情緒的に安定しており、思いやりを持って他者と積極的に関わる性格特性を有する。そのような生徒は、教師や友人との関係が良好であり、意欲的に学習に取り組んでいるといえよう。

春学期、秋学期ともに、生活に張りがなく、将来展望のない生徒は、情緒的に不安定で、他者への関わりは消極的な性格特性を有する。そのような生徒は、教師や友人との関係がうまく築けず、学習への意欲も低いといえよう。